

國學院大學學術情報リポジトリ

海の敵としての日本： 1930年代ソ連における日ソ漁業関係の語り

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-06-17 キーワード (Ja): ソ連史, 日露・日ソ関係, 1930年代, ロシア（ソ連）極東, 北洋漁業 キーワード (En): 作成者: 神長, 英輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001726

海の敵としての日本

——1930年代ソ連における 日ソ漁業関係の語り——

神長英輔

はじめに 論文の目的と研究史

1930年代のソ連で漁業についての日ソ関係はどのように語られていたのだろうか。この論文で私は、当時の日ソの漁業関係に関する各種の出版メディア上の言説を類型化し、その特徴を明らかにする。

新聞、雑誌、書籍、ラジオ、映画など1930年代のソ連の各種のメディアでは「敵としての日本」という表象が多様な形で構築されていた。スターリンを中心とするこの時期の党指導部もそうした「敵としての日本」という表象を積極的に利用していた⁽¹⁾。

この時期の日本についての表象は、自国（ソ連）についての肯定的な表象を構築するためにも利用された。各種のメディアはこれらの表象を用いて日本を好戦的な侵略者として描き出し、侵略者に対抗するための団結を国民に呼びかけた⁽²⁾。また、日本は「軍部が支配し、資本家や地主が労働者や農民を搾取する国」、つまり「階級の敵」の国として、しばしばソ連との比較の対象にされ、そうした比較において平和を愛する社会主義国家としてのソ連の先進性と優越性が強調された。

敵としての日本の表象には、日本人の身体的特徴を誇張して戯画化するような人種差別的なものも含まれていた。敵としての日本の表象は1930年代に積極的に構築されたが、それ以前に作られた、日本についてのさまざまな表象と連続する要素を含んでいた⁽³⁾。当時のソ連は労働者の国際的な連帯を唱えていたが、メディアの一部にはその主張を裏切るような差別的な表象も姿を現した。

敵としての日本についての研究はおもにロシアの研究者によって進められてきた。ユリア・ミハイロヴァはロシアの人々のアイデンティティ形成の歴史と関連づけながら、ポスターの分析を中心とした方法で敵としての日本が1930年代のソ連社会に及ぼした影響力を明らかにした⁽⁴⁾。また、イリーナ・メリニコヴァは敵としての日本が主題となった1930年代のソ連映画を分析し、それらの映画にお

ける日本人の表象の具体的な特徴を明らかにした⁽⁵⁾。これらの先駆的な業績に続き、敵としての日本を論じた各種のメディア言説を類型化した概説的な研究(アレクサンドル・リフシンほか)⁽⁶⁾や、1930年代の赤軍指導部の日本観についての研究(アナスタシヤ・ロシキナ)⁽⁷⁾、日ソ戦争(1945年8月)に参加した元兵士らの日本観の研究(ウラジミール・ダツィシェン)⁽⁸⁾、あるいはロシアの歴史教科書における日本表象の研究(ゲンナジイ・ボルデュゴフほか)⁽⁹⁾などがあり、ロシアにおけるこの分野の研究は着実な進展を遂げている。

これらの研究が対象とする敵としての日本は、ほぼ全てが陸の(満洲国や植民地朝鮮とソ連極東の)国境でソ連と対峙し、陸の国境を脅かす敵の表象だった。実際、当時のソ連で多く描かれた敵としての日本は極東の(陸の)国境を脅かす敵だった。しかし、この時期には、ソ連極東の海にも敵としての日本がいた。日本の北洋漁業である。

日露戦争の後、日本の漁業者がカムチャツカ半島を中心としたソ連極東の沿岸で競争入札によって漁業権を得てサケ・マス漁業を展開した。この漁業権は革命・内戦期にも行使され、1925年の日ソ基本条約でもソ連はこの権利を承認した。第二次世界大戦後のソ連の歴史学は、こうした日本の漁業者の活動を帝国主義的な性格を帯びたものとして否定的に評価する一方で、1930年代以降はソ連の国営企業が日本の漁業者を圧倒して駆逐したという見方を示した⁽¹⁰⁾。こうした見方はおおむね当を得たものであり、ソ連解体後も書き換えられずに現在に至っている。

この論文で私が問うのは、1930年代のソ連極東の漁業をめぐる日ソ関係の語り方である。ソ連メディアとは対照的に、同時期の日本の新聞や出版メディアでは、日本の漁業者の権益を脅かす敵としてソ連当局が描き出され、そうした権益を説得力のある形で説明するためのレトリックや物語の構造が生み出されていた⁽¹¹⁾。ソ連の新聞や出版メディアでも似たような事態は起こっていたのだろうか。ソ連極東の漁業に関して海の敵としての日本という表象があったとすれば、それはどのような形で存在し、どのような特徴を持っていたのだろうか。この論文は以上の問いに答えることを目的とする。

この論文は三つの節で構成される。第一節では、まず、1930年前後の日ソの漁業関係を概観し、次いで、関係する言説に見られる三つの特徴を提示する。第二節と第三節では、いくつかの具体的な言説を例としてこの三つの特徴を指摘し、海の敵について何が語られ、何が語られていないのか、また、どのようなレトリックが使われているのかを明らかにする。第二節では、1930年代のマスメディアの言説の例として、個別の新聞記事における海の敵としての日本を分析し、第三節では、1930年代の出版メディアの言説の例として専門的な研究書と文学における海の敵としての日本を分析する。結論では、第二節と第三節での分析をもとに三つの特徴について考察し、このテーマの研究に関する今後の課題を示す。

「海の敵としての日本」の表象を扱った先行研究はロシアにも日本にも見当た

らない。先行研究が乏しいため、この論文にも扱う史料の少なさや方法の未熟さなどの課題がある。研究史におけるこの論文の第一義の目的は、このテーマに関わる捨て石として問題提起をすることにある。

1 三つの特徴 プロレタリア国際主義、差異化、積極的な沈黙

この節では、まず、1930年前後の日ソの漁業関係について概観し、次いで、関係する言説に見られる三つの特徴を仮説として提示する。

日本とソ連の関係は1925年の日ソ基本条約によって正常化した⁽¹²⁾。これを受けて両国は1928年1月に日ソ漁業条約を結んだ。日本は1905年のポーツマス講和条約によってロシア極東の沿岸海域における漁業権を得ており、企業や個人事業者からなる日本の漁業者は、ロシア側当局が実施する、沿岸漁業の漁場の競争入札に参加することができた。1928年の条約は両国がこの権益を改めて確認するものだった。

しかし、その直後のソ連では、「上からの革命」によってさまざまな産業の構造が大きく変化した。ロシア極東の太平洋沿岸の地域では、漁業が重要な産業に位置づけられ、特に第1次五か年計画以降は集中的な投資や労働力の配置を受けて、急速にその規模を拡大した。その中でもカムチャツカでは、国営カムチャツカ株式会社が日魯漁業株式会社などの日本の漁業者と漁場の競争入札で激しく競合し、日本の漁業者に代わって多くの優良漁場を経営するようになった。ソ連当局も制度の変更などの形でこれらのソ連企業を支援した。一方、日本の漁業者は企業合同を進め、また領海外の公海における漁業、いわゆる「沖取り」漁業の漁場開発を進めてソ連企業に対抗した。

こうした状況を受けて、日本政府が漁区（漁場）数の現状維持をソ連政府に働きかけ、1932年8月に暫定協定の調印という形で両国間の妥協が成立した。その後、1928年の条約が1936年5月に失効する予定だったので、1935年から条約改定交渉が始まった。しかし、交渉が難航して条約は失効した。その結果、1930年代後半の両国は新条約を結ばないまま、毎年の年末に暫定協定を結んで現状維持で合意することを繰り返した。

このように漁業問題は当時の日ソ間の懸案だった。しかし、後で述べる通り、懸案だった割に、この問題に関する当時のソ連の報道や文献は少ない。

アメリカのEast View社は、ソ連期の主要紙の『ブラウダ（Правда）』と『イズヴェスチヤ（Известия）』の紙面データベースをインターネット上で提供している⁽¹³⁾。私も研究にあたってこのデータベースを利用した。このデータベースには件名による分類がないので、日ソの漁業問題に関する記事を見つけるために、私は「日ソ」、「日本」、「漁業」などの語句を入力して検索することを繰り返した。しかし、複数の語句による検索を繰り返しても、日ソの漁業問題に関する新聞記

事は合わせて年に数件以下しか見つからなかった。

また、ソ連科学アカデミーの東洋学研究所は1960年代から1980年代にかけて、18世紀前半から1970年代までの日本に関する文献を整理した書誌『日本関係書誌 (Библиография Японии)』を編纂した⁽¹⁴⁾。この書誌はソ連で発行された日本に関係する雑誌記事と単行本の書誌情報を網羅したものである。書誌なのでそもそも件名や索引が充実しているし、インターネット上にはこの書誌の電子化された全文があるので、そこから特定の語句を検索することもできる。ただ、それでも、1930年代に世に出た日ソの漁業問題に関わる文献は問題の大きさに比して少なかった。

本論文では、私は以上の方法で検索して入手した新聞記事と文献を資料として用いた。私自身による検索の不備もあるし、書誌情報が見つかっても現物を見られなかった文献がある。それゆえ、この論文で私が以下に示す見解はあくまでも暫定的な分析の結果に過ぎない。

日ソ漁業問題について語る当時のソ連の言説の語りには、三つの共通する特徴がある。それらは、プロレタリア国際主義の原則、日ソの漁業者の（協力的、あるいは、相互依存的な）関わりに言及しないという「積極的な沈黙」、異質な他者として日本を貶める差異化の三つである。

第一の特徴はプロレタリア国際主義の原則である。プロレタリア国際主義とは「各国のプロレタリアの利害は一致しているので、全世界のプロレタリアは（それぞれが属する国に関わらず）資本主義社会を打倒するために団結すべきだ」という考え方である。具体的に言い換えると、「敵対すべきは日本の資本家であり、（ソ連国民にとって）日本の労働者大衆は連帯すべき仲間だ」ということになる。ただし、これは日ソの漁業問題に限られた特徴ではない。これはレーニン以来のソ連共産党が掲げてきた建前としての原則であり、国際関係に関わる当時の言説であれば、広く見られる特徴である。

第二の特徴は日ソの漁業者の（協力的、あるいは、相互依存的な）関わりに言及しないという「積極的な沈黙」である。例えば、日ソの漁業交渉を報じる新聞記事でも、漁業問題の現状やその経緯についての説明はたいいてい省かれた。また、日本の「北洋漁業」がポーツマス講和条約に基づく帝国主義的な権益に由来していることや、日ソの国交正常化の際にソ連政府がその権益の継続を認めたこと、革命前から1930年前後までロシア・ソ連の漁業者が函館で資材を購入して多くの日本の労働者を雇用していたことなどは全く語られなかった。

第三の特徴は日本を異質な他者として貶める差異化である。差異化される日本は以下の三つ、日本帝国主義、日本人による（ソ連極東の）漁業、（民族としての）日本人に大別できる。

第一の「日本」は日本帝国主義である。この日本（帝国主義）は必ず侮蔑的な語句の多用によって貶められる。抽象的な日本帝国主義そのものが攻撃されると

いうよりは、日本帝国主義を主題とした言説の中で、組織的かつ計画的に（帝国主義的な）陰謀を進める日本の新聞各紙、大手の漁業会社、業界団体、財界が侮蔑されるのが通例である。

第二の「日本」は（ソ連極東における）日本人による漁業（日本でいう「北洋漁業」）である。多くの場合、日本の漁業者による漁業とソ連の漁業者による漁業は、遅れたものと先進のものとして対比的に描かれた。これは、ロシア（ソ連）が先進の西洋の文明圏にあり、一方で日本が後進の東洋の文明圏にあるという、（帝政期からある）オリエンタリズム的な言説実践とも考えられるし、革命を経た社会主義のソ連の生産様式を資本主義の日本のそれよりも進んでいるとする、いわば、史的唯物論的な言説実践とも考えられる。

興味深いことに、当時の日本の各メディアでは、「先進の日本と後進のロシア」という、これと裏返しの言説が多く出回っていた。実際のところ、漁獲や生産に関わる技術の評価については単純な比較が難しく、また、全体として双方の技術に大きな差があったとは言いがたい。双方に全く交流がなかったわけではないので、遅れた、あるいは、進んだという評価は、現実の生産の実態に基づくものとは言えない。

第三の「日本」は（民族としての）日本人である。例えば、漁業の現場を描いた小説には日本人の身体的な特徴を揶揄する差別的な表現が見られた。ただ、人種差別はプロレタリア国際主義と両立しないので、全体として数は少ない。『プラウダ』や『イズヴェスチヤ』の漁業関係の記事にもそうした表現は見当たらない。

以下の第二節と第三節では、新聞記事などの具体的な言説を例にして、以上の三つの特徴、プロレタリア国際主義の原則、積極的な沈黙、差異化を分析して考察する。

2 新聞における日ソ漁業問題の語り

先に述べた通り、1930年代を通じて漁業問題は日ソ双方にとっての懸案であり続けた。しかし、ソ連の新聞がこれらの問題を取り上げる機会は少なかった。主要紙の『プラウダ』や『イズヴェスチヤ』のほか、当時の極東地方の主要紙『太平洋の星（Тихоокеанская звезда）』（ハバロフスクで発行）にも、漁業関係の記事がしばしば現れたが、日ソ間の漁業問題の扱いは小さかった。これは、関東軍が満洲国国境から挑発や侵犯を繰り返している、あるいは、満州事変や日中戦争の戦線を拡大しているとする記事の多さと対照的だった。

1931年3月16日、東京で在日ソ連通商代表が日本人に狙撃されて重傷を負う事件が起きた。翌17日の『イズヴェスチヤ』はこの事件を詳しく報じた⁽¹⁵⁾。前半の記事は狙撃事件の詳細であり、後半は事件の背景の解説だった。

記事の力点は明らかに後半に置かれていた。記事はまず日本の新聞報道を引用

し、容疑者がソ連極東の森林開発に携わる日本企業に勤めた経験があると伝えた。当時の日本の新聞報道は不明の点が多いとして犯行の動機を詳報しなかったが、『イズヴェスチヤ』は、この事件が「強欲な (хищный)」漁業者団体の「陰謀」であると断定し、その漁業者団体が漁業条約の破棄などを目指してソ連を非難する「全く虚偽のキャンペーン」を張っていると報じた。「強欲な漁業者団体」を名指しすることは控えているが、これは明らかに、ソ連領内で操業する日本の漁業者で構成された露領水産組合のことだろう。

日本の漁業者のうち、最大手の日魯漁業株式会社や漁業者団体の露領水産組合は、しばしば「強欲な」という修飾語とともに非難の対象になった。この形容詞から派生した「略奪的な・濫獲の (хищнический)」という形容詞は、日本の漁業者の行動を非難する際に修飾語として多用された。日本の漁業者に対する評価は「濫獲と強欲」でほぼ一定している。

一方、この記事での日本政府に対する非難は抑制的だった。記事は反ソキャンペーンを積極的に抑えないことへの不満を示す一方、日本政府による遺憾の意の声明も小見出し付きで紹介していた。

『ブラウダ』や『イズヴェスチヤ』は、少なくとも漁業問題に関しては、日本政府に対する露骨な非難を控えていた。1934年2月3日の『イズヴェスチヤ』は「日本の漁業者がソ連水域での自らの漁業を拡大しようとしている」という見出しで、前々日2月1日の貴族院予算委員会での「北洋」問題に関する質疑を紹介した⁽¹⁶⁾。この記事は、「北洋漁業の問題は満州問題と同じく日本の生命線である」という政友会の議員の発言を紹介していたが、その発言に対しても、その発言に理解を示した廣田弘毅外相にも非難は加えられなかった。

1934年春のソ連指導部は（穏健派である）廣田の（日本政府内における）負担を減らすことで日ソ関係の尖鋭化を避けようとしていたので⁽¹⁷⁾、この記事では廣田に対する配慮があった可能性が大きい。ただ、そうした配慮を差し引いても、その前後の時期を含め、1930年代はそもそも、漁業問題に関して日本政府を非難するような動きがほぼ見られなかった。

1931年4月2日の『ブラウダ』は「日本漁業者の厚顔」という見出しで1931年度の漁期に関する日本の露領水産組合の決議を詳しく報じた⁽¹⁸⁾。同日の紙面にはこれと同時に「日本の新聞の虚報」という見出しの記事があり⁽¹⁹⁾、さらにそのすぐ下に「(ソ連国営の) タス通信は日本の各紙の報道を否定している」という記事がある⁽²⁰⁾。

日本の各紙の報道とは、当時、モスクワで進んでいた日ソの漁業交渉についての報道である。この漁業交渉は、先に紹介した通り、漁業条約とは別の枠組みで日ソ双方が経営する漁区の数の現状維持を定めようとする試みであり、交渉の後、最終的には1932年8月の暫定協定として日ソ間の合意が成立している。

しかし、こうした重要な交渉でありながら、『ブラウダ』や『イズヴェスチヤ』

は日本の各紙の報道の内容を否定するだけで、協議の具体的な内容には触れなかった。1931年4月18日の『イズヴェスチヤ』にも「日ソ漁業交渉についての日本の新聞雑誌の報道」という見出しの記事がある⁽²¹⁾が、ここでも『イズヴェスチヤ』は交渉の内容に触れず、日本の各紙が「誤情報を伝え」続けていると述べるにとどまった。

少し後、漁業条約の改定交渉が始まった1935年もこの傾向は変わらなかった。1935年5月24日の『イズヴェスチヤ』は、「日本との漁業交渉に向けて」という見出しで漁業条約の改定交渉の見通しを伝えた⁽²²⁾。この記事でも非難の対象は日本の新聞各紙であり、各紙が「誤った状況を描き出し」、「一部の勢力が（世論を）だまそうとしている」と述べ、さらに「私たちはこの手の不格好な策略に慣れているし、こうしたことを簡単に見抜くことにも慣れている」と誇った。しかし、漁業交渉の内容に関する説明はほぼなかった。

以上で見た通り、この時期、日ソ間の漁業問題に関してソ連の新聞報道が定めた「敵」は「虚偽の報道で日本の世論をだます」日本の新聞各紙だった。日本の漁業者も「強欲な」という修飾語と共にしばしば非難の対象となっていたが、日本の新聞各紙はそれ以上の頻度で攻撃の対象になっていた。

第一節で掲げた特徴のうち、ここでは、プロレタリア国際主義の原則、「日本」を貶める差異化、日ソの漁業の関わりについての積極的な沈黙という三つの特徴を全て見て取ることができる。

ここで掲げた『ブラウダ』と『イズヴェスチヤ』の各記事の主張を要約すると、「漁業会社などの資本家がその意向を汲んだ大手の新聞と結託し、日本の人民大衆を欺いている」、つまり、「日本の人民大衆は騙されており、悪いのは新聞とその背後にいる勢力だ」ということになる。これは第一の特徴、プロレタリア国際主義の原則に従う主張である。この時期の党指導部は民族や国家としての日本全体の敵視を注意深く避けるよう指示していた⁽²³⁾。漁業問題の報道もこの原則に忠実だった。

一方で、日本の人民を欺く日本の新聞を非難するにあたっては、侮蔑的な語句が多用され、『イズヴェスチヤ』は「われわれはそうした欺瞞を見抜いている」と誇った。陰謀がまずあり、その陰謀の担い手を侮蔑的な語句で非難するという、第三の特徴の日本を貶める差異化である。

また、漁業交渉の報道であるにもかかわらず、漁業問題の歴史的な経緯が語られることはなく、交渉の具体的な争点が紹介されることもなかった。日ソの漁業の具体的な関係の語りを徹底的に避けたこと、これは第二の特徴の積極的な沈黙である。ここまでの消極的な語りはもはや意図的な隠ぺいに近い。

プロレタリア国際主義の原則の一方、日本の漁業者との相互依存的な関係には言及せず、侮蔑的な表現を多用して日本を異質な他者として強調する。これら三つの特徴は新聞以外でも観察できる。カムチャツカの漁業を主題とした研究書と

小説の中にそうした言説実践の例を見ていこう。

3 研究書と小説における日ソ漁業問題の語り

シベリア学者で作家のミハイル・セルゲーエフ (1888–1965) の『カムチャツカ地方の国民経済』(1936年) は800ページを超える大著である⁽²⁴⁾。この本は漁業を中心とした1930年代前半のカムチャツカの発展について、現状とその背景を詳述した研究書である。極東の主要紙『太平洋の星』(1936年 6 月 1 日) でもその出版が報じられており⁽²⁵⁾、当時、この本が注目され、それなりの数の人々に読まれたのは確かだろう。

大著であるだけに、カムチャツカ漁業と日本漁業との関係には一定の紙幅が割かれている。しかし、語りの対象になっている時期は限られている。1920年代後半から1930年代半ばまで、つまりはソ連成立以降の十数年の日ソ関係が記述の多くを占め、それ以前についての言及は少ない。その結果として日ソの漁業者がより深く関わりあっていた時期の記述も少なくなっている。記述の少なさが意図的なのかは不明だが、ここでも第二の特徴、相互依存的な関係についての積極的な沈黙が見られるのは確かだ。

セルゲーエフは何よりも第 1 次五か年計画が起こした変化を強調する。長い間、「日本の漁業干渉がカムチャツカ地方の漁業の運命を左右し、カムチャツカの人々の生活全般にさまざまな影響を及ぼしてきた⁽²⁶⁾」が、第 1 次五か年計画によるソ連漁業の発展がそうした日本の影響力を弱めた。これがセルゲーエフの主張の要点である。「漁業干渉」はカムチャツカにおける日本の漁業を干渉戦争であるシベリア出兵になぞらえた表現だが、「漁業干渉」の具体的な様相はほとんど語られていない。

1930年代現在の日ソの漁業問題を論じるにあたり、セルゲーエフが論拠にしているのは、基本的に『ブラウダ』と『イズヴェスチヤ』であり、セルゲーエフの記述の特徴もこれらの新聞記事の特徴に近い。

専門的な研究であるだけに、カムチャツカにおける日本の漁業とソ連の漁業に関してセルゲーエフが示した論点は多岐にわたる。しかし、語りの特徴は、第一節で提示し、第二節の新聞記事で具体的な実践例を見てきたものとはほぼ同じである。セルゲーエフもまた、プロレタリア国際主義の原則を掲げつつも、侮蔑的な表現を多用し、日ソの漁業者の相互依存的な関係には言及しない。『ブラウダ』や『イズヴェスチヤ』との違いは、日本の新聞よりも大手の漁業者とその背後にいる大資本を強く敵視している点と、日ソの漁業者を競争者として対比的に描いた部分がある点である。

セルゲーエフもプロレタリア国際主義の原則に従っている。「日本の中でも労働者大衆や分別のある経済界の人々は社会主義国家としてのソ連に共感を示して

いるし、中小の漁業者は近年まで反ソキャンペーンに反対してきた」とし⁽²⁷⁾、最大手の漁業者である日魯漁業とその背後の大資本を主敵と見なしている。その一方、日本の新聞や日本政府に対する非難は少ない。

ソ連の漁業政策の目的は生産力の向上であり、日本の権益の排除を目的とするものではなかったが、政策の結果として日本の大資本家にとってカムチャツカ株式会社という巨大な競争相手が出現したため、日本側がわれわれを敵視するようになった⁽²⁸⁾。これがセルゲーエフの論理である。

セルゲーエフは「われわれは友好的だが、彼らがわれわれを敵視している」と述べる。しかし、「日魯漁業の大資本家経営者の凶暴性」⁽²⁹⁾、「組織的な条約規定違反」⁽³⁰⁾、「ソ連領海での度重なる濫獲」⁽³¹⁾、「こうした勢力にそそのかされた新聞」⁽³²⁾、「露骨な言いがかり」⁽³³⁾、「スパイ行為」⁽³⁴⁾、「妨害行為」⁽³⁵⁾、「組織的な挑発の企て」⁽³⁶⁾、「けがらわしい奴ら」⁽³⁷⁾など、多くの侮蔑的な語句を見る限り、敵視の姿勢は明らかである。

『ブラウダ』や『イズヴェスチヤ』と同じく、セルゲーエフも日ソの漁業者の関わりをほぼ語らない一方で、日本の政財界の陰謀は雄弁に語る。陰謀の語りは実に多様で細かい。いわく、1920年代末からのソ連漁業の成長が日本の大手漁業者に敵意を抱かせた一方で、同時に起こった世界恐慌が日本経済に危機をもたらしたため、日本帝国主義は世界の再分割を試みて、まず満州と内モンゴルを支配し、計画の次の段階としてソ連極東とモンゴル人民共和国の侵略に乗り出した。ソ連極東の漁業問題はこのような大きな状況の変化に関係している⁽³⁸⁾。干渉戦争（シベリア出兵）を主導した政友会が今回も漁業問題を大陸の侵略計画と結びつけている。政友会は北サハリンの権益に関与する三井財閥に近い⁽³⁹⁾。帝国主義者や御用学者が歴史を捏造して日本によるカムチャツカの資源開発を正当化している⁽⁴⁰⁾。

実際のところ、日本において大手の漁業者と新聞や雑誌が連携し、また、漁業者が政治家を支援して「北洋」問題に関する反ソキャンペーンを展開していたのは事実であり、彼らが史料を恣意的に利用して日本人によるカムチャツカの開発を正当化したのも事実である。セルゲーエフがソ連の新聞記事を根拠として示す「陰謀」には一部の事実が含まれており、そうした事実が「陰謀」の説得力を増しているのは確かだ。ただし、そうした「陰謀」を構成する個々の出来事の間の関係は具体的に論証されていないので、大きな「陰謀」が計画的に進められたとまで言うのは言い過ぎである。

カムチャツカにおける日ソの漁業を対比的に描いたことは、『ブラウダ』などの新聞報道にない本書の特徴である。第一節で述べた通り、対比に際しては「先進のソ連と後進の日本」という図式が示された。例えば、サケ・マスの加工法を紹介した箇所では、「革命前のカムチャツカでは、日本式の方法によるサケ・マスの塩蔵が主流だった」として、次のように「日本式」が紹介された。

内臓を取った魚には日本の(粗く、黄色く、苦く、汚い)塩が詰め込まれ、野ざらしの地面の上に山積みされる。製品はこうして風と日光で乾かされるので、魚の脂肪は地面に流れ出る。苦く、塩辛く、乾き、硬く、栄養の大半が失われた魚は日本の労働者向けの商品であり、約9割の製品がこうした野蛮な方法で加工された。(中略) 高価なサケをこのように加工してしまうくらいなので、ニシンを運ぶ際に何の下処理もせずにただ船倉に詰め込むだけというのも驚きではない⁽⁴¹⁾。

本文はこの後、「ソ連漁業は製造の品質についても革命を起こした」と続き⁽⁴²⁾、ソ連企業の手による、栄養価も風味も優れた缶詰の生産について述べている。確かに、1910年代までの状況は上記の記述に近い状況だったが、1910年代初めに日魯漁業株式会社の前身である堤商會がカムチャツカで缶詰生産を始め、この時期、1930年代前半の日本の漁業者は全体として見るならば、缶詰生産に生産の重点を移していた。ソ連企業も日本企業もほぼ同時に同じような進捗で生産技術を改良しており、「先進のソ連と後進の日本」という図式はそもそも成り立たない。しかも、1930年前後のソ連企業は熟練の技術者を日本から招いており、協力的な関係にもあった。セルゲーエフは1929年からカムチャツカ株式会社の役員を務めていたので⁽⁴³⁾、そうしたことを知らなかったはずはないが、それらを文中で語ることはなかった。

三つの特徴のうち、プロレタリア国際主義の原則、侮蔑的な語句による日本人の差異化、対比的に描くことによる日本漁業の差異化は、1930年代のカムチャツカを主題にした小説でも見られる。ここではI・シャパノフ(生没年不詳)と、漁業学者で作家のトロフィム・ボリスフ(1882-1941)の小説を例に挙げる。

シャパノフの『カムチャツカ西海岸で』(1933年)⁽⁴⁴⁾はカムチャツカの漁場における突撃労働の熱狂を描いた短編小説である。この物語は著者のシャパノフが語り手であり、同時に、基本的にはシャパノフの視点から物語の中の物事が眺められている。ジェラルド・ジュネットの物語理論に従うと⁽⁴⁵⁾、物語の大半はシャパノフに内的焦点化されていると言える。

細かく見るならば、物語の中で焦点化がシャパノフだけに固定されているわけではない。例えば、「シビリュコフ班の労働者全員はさらに働いてやろうという希望に燃えていた」⁽⁴⁶⁾、または、「フヴォロフは日本人の方を見て不機嫌そうに言った」⁽⁴⁷⁾というように、別の人物に内的焦点化されることもある。

しかし、日本人だけはこの物語の中で決して内的な焦点化の対象にならない。これは強い差異化の一例と言うべきだろう。著者のシャパノフがウラジオストクからカムチャツカに向かう日本の船の中で、船員の日本人と、あるいは、カムチャツカの漁場で日本人の労働者と関わって言葉を交わす機会があるが、そうした、日本人の関わるあらゆる場面で、日本人の登場人物に内的な焦点化がなされることはない。船内での会話はいずれも雑談であり、日本人とロシア人は多少なりと

も打ち解けた様子でもあり、場合によっては直接話法で対話が進むのだが、日本人に内的な焦点化は決してなされない。また、漁場におけるエピソードとして、日本人の労働者たちが突撃労働に向けた決起集会をする場面もあるが、そこですら、日本人に内的な焦点化はなされない。

内的な焦点化は小説ゆえの特徴と言えるが、日本人に内的な焦点化がなされないことは、日本人を他者として構築することに他ならない。また、日本人は複数形の「日本人（японцы）」として語られることがほとんどであり、数少ない個人の日本人との関わりについても、それなりに親しい関係にあったとしても、すべて名無しの単なる「日本人」として語られている。これもロシア人の扱いと対照的である。

この小説でも侮蔑的な語句が使われている。例えば、「東洋的な大きい菌」⁽⁴⁸⁾などという露骨な人種的偏見もある。また、日本人のロシア語の拙さを見下す表現もある⁽⁴⁹⁾。

この小説には、内的な焦点化の拒否や人種差別的な表現などの強い差異化の例が含まれる一方で、日ソの漁業関係者の相互依存的な関係に言及している部分がある。これは同時代の言説の中では例外的である。小説の舞台が漁業の現場である以上、両者の接点がないというのは不自然なので、書かざるをえないとも言える。

当時のカムチャツカの漁場では、日本人から漁労や加工の技術を学ぶことが課題であり、この小説でもそうした場面が出てくる。ただし、この小説で「学ぶ（обучать）」という語が使われたのは、わずかに一か所だけであり⁽⁵⁰⁾、他の箇所では、日本人がロシア人に技術を「伝える」となっている。「学ぶ」が使われた箇所は日本人が書いた文章を引用した部分である。

ボリスソフの『カムチャツカの岸辺に』（1939年）⁽⁵¹⁾の中には「先進のソ連と後進の日本」の図式を示して現在のカムチャツカの漁業の発展を称えた箇所がある。いわく、以前はロシア側の漁場でも網を張るのは日本人だった。しかし、今では水産学校で学んだロシアの若い労働者が科学的な調査に基づいて合理的な位置に網を張り、経験のみに頼る日本人を出し抜いて大きな成功を取めている⁽⁵²⁾。

極東地方で発行された文芸誌には、地域の漁業を主題とした短編小説がしばしば連載されていたので、ここで挙げた小説はごく一例に過ぎない。ただ、新聞記事、学術書、小説と、メディアやジャンルを横断して共通する特徴が観察できたことは興味深い。

おわりに 結論と新たな問題の提起

ここまで述べた通り、1930年代のソ連で日ソの漁業問題を論じたさまざまな言説においては、第一節で指摘した三つの特徴を見て取ることができた。それらは、プロレタリア国際主義の原則、日ソの漁業者の（協力的、あるいは、相互依存的

な) 関わりに言及しないという「積極的な沈黙」、異質な他者として日本を貶める差異化の三つである。

多くの言説ではプロレタリア国際主義の原則が守られ、日本の人民と支配層は区別され、日本の人民を含む国家や民族全体を攻撃の対象にすることは少なかった。ただ、この原則は、いわば公式のイデオロギーであり、この原則が党やソヴェエトの機関紙である『プラウダ』や『イズヴェスチヤ』で順守されていたのは当然と言える。また、1930年代は言論に対する統制が一段と強まった時期であり、学術研究や文学でもこの原則が順守されたことに不思議はない。

重要なのは、第二の特徴と第三の特徴が広く見られたことである。第二節で見た通り、『プラウダ』や『イズヴェスチヤ』は、(人種差別的ではない) 侮蔑的な語句を多用して日本との差異を強調する一方、「積極的な沈黙」を徹底した。両紙の記事は、漁業条約交渉の報道であるにも関わらず、交渉の具体的な争点を語らず、両国の漁業に関する過去の経緯や現状を語らなかった。一方で、日本帝国主義の「陰謀」については、過剰なほど事細かに解説した。

第三節で見た通り、カムチャツカの経済と産業の発展を主題とした学術研究書にも、異質な他者として日本を貶める差異化と、両国の漁業関係者の関わりについての積極的な沈黙という二つの特徴が見られた。ソ連の新聞報道を根拠として日本との関係を論じているためか、日本帝国主義の「陰謀」に多くの紙幅を割いているのは『プラウダ』や『イズヴェスチヤ』と同じである。

カムチャツカの漁業の現場を舞台とした小説には、さすがに無視できないのか、日本人労働者との交流の場面がある。ただ、日本人を貶める差異化には積極的で、プロレタリア国際主義の原則に反するような、身体的な特徴を揶揄する差別的な表現が使われている。

以上の通り、この論文では、日ソの漁業問題の語りの特徴を三つに類型化することができた。こうして、語りの特徴を整理することで、当時のソ連の人々が「日本について思いめぐらせていること」を探るための最低限の手がかりが得られたと私は考える。

その一方でいくつかの課題が明らかになった。第一の課題は同時期の日本における漁業問題の語りとの比較である。私は以前、1930年代の日本における日ソの漁業問題の語りを研究したことがあるが、それらの語りには「先進の日本と後進のソ連」として対比的に差異化することや、侮蔑的な語句でソ連当局の「陰謀」を糾弾することなど、似たような語りの特徴があった⁽⁵³⁾。なぜ両者の語りに似た点があるのか。これは検討に値する。

第二の課題は、同時期のソ連における日本に関わる他の主題の語りとの比較である。1932年は、ロシア革命から十五周年、(シベリア出兵を含む) 干渉戦終了とソ連成立から十周年の記念の年だったので、その年から1930年代半ばにかけては、シベリア出兵を回顧する多くの出版物が世に出た。こうした「シベリア出兵

もの」における日本の語り方は、日本はもちろん、ロシアでもいまだに本格的な研究の対象になっていない。今後、私はこの論文で得られた見解を手がかりにして研究を進めたい。

第三の課題はこの研究における技術的な限界の克服である。今後は史料の質と量を増やして研究を進める必要がある。この論文のような方法で言説を研究する場合は、自らの仮説にそぐわない資料を排除していると見なされないよう、恣意的な取捨選択をせずに、なるべく多くの資料にあたる必要がある。目録としての『日本関係書誌』が優れたものであることは確かだが、新聞記事と文学作品はその対象外だし、個人の回想録や日記なども網羅しているとはいえない。そもそも、ソ連期に編纂された『日本関係書誌』は、出版に対する当局の統制があったことの恩恵なのか、かなり網羅的な目録といえるが、それでも、調べていくと、意図的なのかは定かでないにせよ、漏れを感じることがある。また、この論文は『ブラウザ』と『イズヴェスチヤ』を使ったが、それ以外の新聞は充分に利用できなかった。データベース化されていない新聞の利用には限界が多いが、それでも、手を広げる必要があるだろう。

注

- (1) Лившин А. Я., Ложкина А. С. «Образ власти» и «Образ другого» в 1930-е гг.: политические задачи и пропаганда // Государственное управление. Электронный вестник. № 35. 2012. С. 2.
- (2) Лившин. «Образ власти» и «Образ другого» в 1930-е гг. С. 4.
- (3) Лившин. «Образ власти» и «Образ другого» в 1930-е гг. С. 7.
- (4) Yulia Mikhailova, “Japan’s place in Russian and Soviet national identity from Port Arthur to Khalkhin-gol,” *Japanese Slavic and East European studies* 23 (2003), pp. 1–32.
- (5) Мельникова И. Японская тема в советских “оборонных” фильмах 30-годов // *Japanese Slavic and East European studies*. № 23. 2003. С. 57–81.
- (6) Лившин. «Образ власти» и «Образ другого» в 1930-е гг. С. 1–17.
- (7) Ложкина А. С. Япония в представлениях советского военного руководства 30-х гг. XX в. // Известия Алтайского государственного университета. № 4–5. 2008. С. 111–115.
- (8) Дацышен В. Г. Японцы в описаниях участников советско-японской войны 1945 г. // Ежегодник Япония. № 44. 2015. С. 132–143.
- (9) Бордюгов Г. А., Гёе Х. М. Япония в зеркале российских школьных учебников по истории // Ежегодник Япония. № 39. 2010. С. 117–129.
- (10) 代表的なものが以下。Мандриков А. Т. История рыбной промышленности российского Дальнего Востока (1927–1940 гг.). Владивосток, 2000.
- (11) 詳細は以下を参照。神長英輔『「北洋」の誕生』成文社、2014年。
- (12) この時代の日ソの漁業関係については以下を参照。富田武『戦間期の日ソ関係 1917–1937』岩波書店、2010年。神長『「北洋」の誕生』。神長英輔「第1次五カ年計画期（1928–1932）のソ連極東漁業における日本人労働者 頻発する労働争議とその背景」『新潟国際情報大学国際学部紀要』第1号、2016年、89–102頁。神長英輔「一九三〇年代後半の日ソ漁業交渉」太田出、川島真、森口（土屋）由香、奈良岡聰智編『領海・漁業・外交 19–20世紀の海洋への新視点』晃洋書房、2023年、219–259頁。Kaminaga Eisuke, “International Fisheries

- Conflicts in the Bering Sea in the First Half of the Twentieth Century: Soviet-US-Japan Triangle Relationship,” in Benjamin Beuerle, Sandra Dahlke, and Andreas Renner, eds., *Russia's North Pacific: Centres and Peripheries* (Heidelberg: Heidelberg University Publishing, 2023), p. 43–64.
- (13) Izvestiia. <https://on-demand.eastview.com/browse/publication/11265/udb/1019>. Pravda. <https://on-demand.eastview.com/browse/publication/9305/udb/870>.
 - (14) Библиография Японии. Литература, изданная в Советском Союзе на русском языке с 1917 по 1958 г. / Под ред. В. А. Власова и др. Москва, 1960.
 - (15) Покушение на жизнь торгпреда СССР в Японии. Тов. Аникиев тяжело ранен // Известия. 31. 03. 1931.
 - (16) Японские рыбопромышленники добиваются расширения своего рыболовства в советских водах // Известия. 03. 02. 1935.
 - (17) Адибеков Г. М., Вада Харуки. ВКП(б), Коминтерн и Япония. 1917–1941 гг. Москва, 2001. С. 124.
 - (18) Наглость японских рыбопромышленников // Правда. 02. 04. 1931.
 - (19) Ложное сообщение японских газет // Правда. 02. 04. 1931.
 - (20) Сообщение ТАСС // Правда. 02. 04. 1931.
 - (21) Сообщения японской прессы о рыболовных переговорах между СССР и Японией // Известия. 18. 04. 1931.
 - (22) К переговорам с Японией по рыболовным вопросам // Известия. 24. 05. 1935.
 - (23) Лившин. «Образ власти» и «Образ другого» в 1930-е гг. С. 7. Сталин и Каганович. Переписка. 1931–1936. / Под ред. О. В. Хлевнюк и др. Москва, 2001. С. 396.
 - (24) Сергеев М. А. Народное хозяйство Камчатского края. Москва, 1936.
 - (25) Новые книги о Камчатке // Тихоокеанская Звезда. 01. 06. 1936.
 - (26) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 299.
 - (27) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 309.
 - (28) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 300, С. 305.
 - (29) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 306.
 - (30) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 305.
 - (31) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 305.
 - (32) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 305.
 - (33) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 305.
 - (34) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 306.
 - (35) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 306.
 - (36) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 306.
 - (37) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 308.
 - (38) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 310–311.
 - (39) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 311.
 - (40) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 312.
 - (41) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 244–245.
 - (42) Сергеев. Народное хозяйство Камчатского края. С. 245.
 - (43) Петряев Е. Д. Михаил Алексеевич Сергеев. // Сибирские огни. № 4. 1963. С. 166.
 - (44) Шабанов И. На западном берегу Камчатки: Опыт партмассовой работы на путине. Хабаровск, 1933.
 - (45) ジェラルド・ジュネット (和泉涼一、青柳悦子訳) 『物語の詩学 続・物語のディスクール』

水声社、1985年、68-75頁。

- (46) *Шабанов*. На западном берегу Камчатки. С. 46.
- (47) *Шабанов*. На западном берегу Камчатки. С. 17.
- (48) *Шабанов*. На западном берегу Камчатки. С. 5
- (49) *Шабанов*. На западном берегу Камчатки. С. 17.
- (50) *Шабанов*. На западном берегу Камчатки. С. 52.
- (51) *Борисов* Т. М. На берегах Камчатки. Хабаровск, 1939.
- (52) *Борисов*. На берегах Камчатки. С. 32.
- (53) 神長 『「北洋」の誕生』。